重点取組分野	令和　5　年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
生きてはたらく知	①「しろっ子タイム」において、「学習スタンダード」を意識した学習の振り返りを行い、安心して学習活動に取り組めるようにする。②少人数での話し合い活動等を取り入れ、比較、分類、関連づけなど、思考することをもとに自分の考えをもつ経験を積み重ねる。	今年度は、豊かな心の教育推進校として、道徳の授業を通して、自分の気持ちを伝えたり、友達の考えを聞いて自分の考え方を改めたりすることを重点的に行ってきた。その気付きをもとに、生活に活かしていく所までは課題が残っている。道徳に限らず、普段の生活から継続して取り組んでいきたい。	B
豊かな心	①児童会から提案される「あいさつ運動」を中心に、地域の方などにも進んであいさつする意識を高めていく。道徳・人権の指導を中心に思いやりのある言葉遣いができる子どもを育てていく。②なかよし活動やＹ－Ｐを活用しながら、互いに認め合う気持ちを高めていく。	児童会提案の「あいさつ運動」を行ってきたことで、挨拶を返すことはできているが、自分から進んで挨拶を行えていない児童も多い。ただ、あいさつ運動を通してその価値に気付く児童もいたので、今後も継続できるとよい。YPを学年で分析し、指導に活かすことはできた。	B
健やかな体	①学校保健委員会では、児童が問題意識をもち、生活・行動を振り返ることができるテーマを設定する。手洗いうがいの習慣や衣服の調節など、自分の健康管理を意識づける。②児童委員会の企画による体力アップ週間や、日常の休み時間の外遊びなどから、体を動かす楽しさを体験させる。	手洗い・うがいの習慣が身に付き、遊具や校内の歩き方といったルールを継続的に呼びかけたことで、怪我なく健康的な学校生活を意識できた。運動委員会が主導で取り組んだなわとび週間では、熱心に技に取り組む児童が増えた。一方で、まったく外遊びしない児童も一定数はいる。	A
地域連携	①昔遊び、家庭科学習のボランティアをはじめ、マリノス株式会社（キャリア教育）、日産スタジアム、ケアプラザや地区センターなど、社会科や総合的な学習の時間等での連携した学習に取り組む。②学校運営協議会の充実を図る。③地域学校協働本部と一年を通して協力体制を充実させる。	家庭科のミシン学習や地域の畑での作物の収穫、小机城址の学習などを通して地域の方々と連携して学習を進めることができた。また、横浜マリノス（㈱）と連携した6年生のプロジェクトも半年に渡って行い、中間発表、発表会にも参加していただき、その成果を共有することができた。	A
いじめへの対応	①「いじめ」の定義を再確認し、小さなことも「最悪の事態は」の意識をもって関わる。②「子どもの社会的スキル横浜プログラム」を授業や学校行事の場面で活用している。③児童の発達段階に応じて、教科担任制を取り入れるなど複数の教員が関わるチーム学年経営を推進していく。	「いじめ」の定義を確認し、積極的認知を行うことで、いじめに対して感度を高くもつことができていた。些細なことでも学年で共有し、話し合うことができた。教科担任制を実施することで、複数の視点で児童を見守ることができていた。	A
人材育成・組織運営（働き方）	①育てたい力を明らかにした、「分かる、楽しい、集中できる」授業づくり・環境づくりを学ぶ。②校内メンター研修を全職員でサポート、活用できる体制をつくる。③再現性のある伝達方法を整備する。毎週定例の教務会を行い、小刻みに短時間で、具体的な学校運営の方向性を確認できる場とする。	重点研やメンター研など、共同研究のあり方や職員の協力体制が構築されており、効果的に機能していた。校内メンター研を通じて、初任者や若手教員が安心して仕事に取り組むことができたが、若手メンバーとミドルの職員の交流や指導が盛んにおこなわれるとさらに向上が見込まれる。	B
教育環境整備	①施設、設備、教材・教具の安全性と消耗度合いを点検し、優先順位を考え、計画的に適切な補修や更新を行うことで、カリキュラムに合わせて効果的に活用できるようにする。②ICT機器を有効に活用できるよう、校内のネットワーク環境を改修し、快適な学習環境づくりに取り組む。	各教科、行事等の備品の管理場所が不明瞭であり、その在庫や管理状態もしっかりと　重点研やメンター研など、共同研究のあり方や職員の協力体制が構築されており、効果的に機能していた。校内メンター研を通じて、初任者や若手教員が安心して仕事に取り組むことができたか把握できていない。今後、備品の管理場所を整理して、カリキュラムに合わせた効果的な活用をしていきたい。	B
児童指導	①「しろさとっ子のきまり」を全職員で共通理解し同じ基準で児童指導にあたる。②年2回のＹ－Ｐを活用して児童の実態や気持ちの変化を見取り学級経営に活かす。③年3回の学校生活アンケートの結果を学年全体で共有し専任等の複数の目で見守り担任ひとりが抱えることなく体制づくりを行う。	きまりを学年で共有しながら、同じ基準で児童指導ができるよう努めた。細かいところで、曖昧なところがあるため、毎年確認と実態に応じて見直しをはかることが必要である。生活アンケートやYPを活用して学年、専任が連携し児童理解に努めた。YPの成果が感じられるまではもう一歩と感じている。	B
特別支援教育	①個に応じた支援をするために、特別支援教育の視点をもった授業づくりを意識して教育課程編成に取り組む。②職員研修を通して、ユニバーサルデザインやインクルーシブ教育の考えを取り入れた授業を組み立て、スキルアップを図る。	個別に支援が必要な児童を学年研やケース会議で共有したり、いちょう教室と連携したりして個に応じた支援に取り組んだ。今後、インクルーシブ教育に向けて、一般級における特別支援の具体や授業づくりについて、研修を充実させて更なるスキルアップを図る必要がある。	B

ブロック内評価後の気付き	小中ブロックでの交流会議において教科研究討議を行い、基礎学力の定着を図るための取組、豊かなコミュニケーション能力を育成するための取組、授業におけるICTの活用を推進していくための取組の3本柱で研究を深めてきた。小中情報交換を図る中で、小学校における基礎学力の定着の重要性、ICT活用の継続の必要性が課題として浮き彫りになった。来年度もそういった課題を解決するための小中連携を行っていきたい。
学校関係者評価	学校が地域との関わりに重きをおいて教育活動を行っていることに高評価を得ることができた。小机城址の学習においては城の会、マリノスプロジェクトにおいては横浜マリノス(株)、そのほか多くの地域協力者の支援のもと、活気ある教育活動を授業参観や様々な行事から見取ることができたと評価していただいた。中止となっていた「しろさとフェスティバル」も今年度、PTA役員と学校が協力して進め、当日は、多くの児童や保護者、地域住民が訪れ、大盛況であった。地域を大事にする学校として、今後も地域に開かれた教育課程を目指していきたい。

中期取組目標振り返り	今年度は、豊かな心の育成推進校として全教員が授業公開を行った。道徳の授業展開の仕方や振り返りの仕方、価値把握の方法など、講師を招いて研究したり、部会で討論したりして研究を深めた。その成果は、道徳的価値の気付いきが子どもたちの振り返りから見取ることができたことである。また、コロナ禍で十分に行えなかった地域連携が、今年度より満足のいく形で行えたことも成果の一つである。地域と連携しつつ、アクティブラーニング形式で授業が行えたことは、子どもたちの生きた学習となり、価値の高いものとなったといえる。教育環境の整備など課題も残しているため、次年度以降も引き続き改善に努めたい。